庄司和晃　私の研究遍歴・談話録（２）

ひとつ固めよ、新たな展開が見えてくる

２０１４．７．５　全面研例会（於　成城学園）

（１）お寺の次男坊という生まれ

僕がお寺さんの赤ん坊に生まれたことは決定的でしたね。

兵隊さんになって戦争に行きたかったので予科練に入ったけど、まもなく特攻隊としての訓練中に戦争が終りました。帰って来て百姓などをやりながら、やがて先生になりたいと師範学校に入るという道を歩みました。この頃から自分はお寺に生まれたんだなあということを自覚していきました。

「生まれ」と言えば、板倉聖宣さんの生まれは金属加工の職人さんの家です。板倉さんはそのことをかなり誇りにしていますね。板倉さんの創設した仮説実験授業の性格を「生まれ」から解釈することもできそうです。「生まれ」は人生に対して深い影響を与え、それが現在の仕事にも強く結びついていることをひしひしと感じます。

僕も曹洞宗のお寺の次男坊に生まれたので、宗祖（開祖）道元さんの、もっと広くいえば仏教の影響をうけたのは確かなんですが、宗教教育ということになると、どうもうまくいかないんですね。イスラム教ではアラーの神、キリスト教その前身のユダヤ教ではヤファエの神といった一神教ですから、世界創造を説明する場合もスッキリ筋が通るのですが、仏教はそうはいかない。

お釈迦様の教えは菩提樹の下で悟りをひらいたことから始まると言われますが、これは縁起思想です。つまり悩みは縁によって起こるからこれを自覚することによって悩みから逃れられる。これをみんなに説くことが仏教のはじまりです。だから一神教で言う神様というのはいないんです。ただ仏教で神と言えば、一つは「天」を意味します。そこに毘沙門天など仏教以前のインド伝来の神様たちがいらっしゃり、仏（悟りを得た者）を守るという位置づけになります。

しかし、たとえば神様の発展過程というものを見てゆくと仏教の位置づけは難しい。教育も神様一本で整理するというわけにもいきません。ただ禅宗の場合は、座禅を活用できることが利点ですね。今ではキリスト教関係でも座禅を組む人がいますから、やはり道元さんが最初に著した『普勧座禅儀（ふかんざぜんぎ）』の意義は大きい。座禅を普(あまね)く勧める本ですから、誰でもやれるという、ヨガの方から来た方法です。だから仏教ではご本尊様というのは元々いないはずなんです。

でも実家は曹洞宗でありながら、ときにお釈迦様を無理矢理に祀って礼拝したりお経を読んだりしていますが、中身的には元々ご本尊様はありえない。またどういうわけか、浄土宗系の仏教では阿弥陀様が祀られていますが、真宗の親鸞さんなどは「帰命十方無碍光如来」（きみょうじっぽう むげこうにょらい）と、実に抽象的な言葉で心得を言い表すだけで、阿弥陀様の仏像や絵とかを祀るということを一切やりません。しかし真言宗などになってくると大日如来様が祀られたり、薬師如来様を祀るお寺さんが出てきたりと、見かけでは一神教的ありかたと似てくるんだけど、もともと仏教では「絶対者」といった存在はつくらないのです。このように見てくると、自分が仏になってゆくのだという、仏教本来の思想が流れているのは禅宗が濃厚です。だからこれまで宗教教育を考えるとき、仏教においては「座禅本位」を軸に考えてきました。

たとえば安泰寺（あんたいじ）という曹洞宗のお寺があります。戦前、京都洛北に建てられた禅道場です。ここは京都大学に通う曹洞宗のエリート学僧の宿舎兼修行場所になっていたました。戦時中は檀家もいない雨漏りのするような寺でした。戦後、内山興正（うちやま こうしょう）さんが住職の時、普及宣伝・市場済度（しじょうさいど）を盛んにやって、座禅本意の修行道場として再

興したのです。これは師匠の沢木興道（さわき こうどう）さんの説を受け継いで、もう座禅していれば間違いない、座禅がいわゆる「本堂」なのだという意味で、ここにはお釈迦様の像や絵を置かなかったのです。置いたのは扇風機です、座禅中に涼しくなるように（笑）。だから、師匠（前住職）の沢木さんが亡くなった時は、いわゆる葬式ではなく、弔問者が来ると座禅をしてもらうだけだったといいます。このように、そもそも仏教とはなにかを考えさせるお寺も存在するのです。

その後、参禅者の増加と、京都の市街地が拡張され環境が悪化したため高額で売却され、一九七七年に兵庫県の日本海側（美方郡新温泉町）に移転しました。移転先はかつて集落があった不便な土地でしたが成城学園が三つも四つも入れるような広大な所でした。現在は九代目のドイツ人のネルケ無方（むほう）という人が住職で、座禅の啓蒙書を何冊も書いて、テレビなどにも出ています。そして国内ばかりか外人さんも進んで参禅するようなお寺になりました。外国人が十数人、安泰寺の修行僧になっているようです。

いつかＮＨＫで放映されましたが、この寺には檀家が居ないので、田んぼや畑を設けて作物を育てる。電気もなければガスもないので木を切っては灯りや薪とする。みんなでかわりばんこに台所に立って食事を作り、座禅中心の自給自足の暮らしを営んでいます。このように座禅本位の修行は僕が得度（とくど）する際にも取り組みやすかったといえます。

曹洞宗のお寺に生まれたということは、このような座禅本位の修行の流れに自分を置いて育ったということを意味します。意識せずにそれなりの影響を受けたということですが、親父の教えで良かったところは、仏教とか坊主についてはほとんど何も教えてもらわなかったことですね。わずかに、般若心経を詠むときに鉦をどこでどう鳴らしたらいいか、それから托鉢に出かけてお金やお米を頂いたときに必ず称えごとを口にすることくらいでした。ただ兄貴は跡継ぎでしたからそれなりの教えを受けたようですが、僕にとっては「教えてもらわなかった」ということが逆に「へえー、なんだいこれは？」という疑問や問題意識を養うことになったと思いますね。

（２）お寺の養子という体験

僕は次男坊だったので、余所のお寺さんに二度、もらわれることになりました。

中学生のとき一回、それから山形県の米沢近くの、西置賜郡の豊田村で教員をしているときの二回です。一回目は荘厳な形でもらわれました。寒河江（さがえ）市の高屋というサクランボ作りで有名な土地でした。いいお寺でした。檀家が多くてね。そこの檀家総代が、僕の小学生時代の氏家先生だったのですよ。お寺は老齢に入ったご夫婦が二人でやっていました。昭和十六年頃です。奥さんはヌートリアというネズミの大きな哺乳動物（当時、軍用毛皮獣として飼育されていた）を飼っておったんです。素麺などを一本ずつ食わせていた記憶があります。ここでは好くしてもらったんです。でも僕はしくじったんですね。

その頃はノミやシラミはどこでも当たり前にいたんです。とくに僕の実家ではもう大変。夏になると新聞紙を敷いて寝ていました。ノミがいるからです。涼しくなってくると今度はシラミ。シラミは良寛さんの話にあるようにびっしり付くでしょう。コロコロしているのね。だから行火（あんか）上の暖かいところで「遊べる」わけ。僕はそのシラミたちを便所の中で潰したんですよ。それを拭き取らずにそのままにして出てしまったものだから大騒動になってしまって・・・。その寺は子供のいないこともあって清潔第一な家だったから無理もない。便所でシラミを見つけたものだから、お二人はびっくりして僕を裸にして服にびっしり付いたシラミを煮沸してまた煮沸してシラミ退治の大騒動になってしまったわけです。いや、怒られちゃって、・・・ワッハッハ、それで逃げて帰ったんですよ。その晩は蛙がゲコゲコ鳴くような今頃の時期でしたなあ。実家もよく引き取ってくれたもんです。

二回目は、戦後上京して成城の教員時代のことです。自分の村にある荻野という部落のお寺さんにもらわれる話です。ここは高台にあって古戦場も近くにある好いところでした。そこは住職さん一人だけなもんだから、僕を欲しくて欲しくてね。僕が「養子には行かない」と言ってもね、勤め先の東京の成城学園まで草履履きで訪ねて来るんです。学校には職員室はなく職員の休憩室までやってきて養子縁組のハンコを押してくれっていうわけね。ジイさん（住職）が草履履きではるばる山形から東京まで来て、それで離れないからね、仕方なくね、僕は「それでは行くことにしよう」と押印したんです。

それからは、休みごとに田舎に帰ってはそのお寺の行事に参加しておったんです。ところがその和尚さんは、僕が成城学園に勤めている間に癌で亡くなってしまいました。その後、檀家総代一同がやって来て跡目をどうするか、ハンコを押してあるんだけど、おまえ住職になるかならないかはっきりしてくれ、こう言うもんだから、「いやあ勘弁してください。やはり教員の道が好きだから」といってお断りしました。そのあと、永平寺で修行した人が跡目を継ぐことになって安心しました。いや、よかったです。

これで養子の話は終わりかと思ったらね、なんと三度目の話が田舎からやって来て、もらわれそうになったんですよ。山形の豊田小学校に新卒で赴任するとき、当時の校長さんが、今泉という長井線の、これもまたデッカイお寺さんに下宿先を決めておいてくれたんです。この寺もお年寄り二人でやっていました。下宿期間中はここでも僕を教育してくれたんです。

たとえば、当時お風呂は五右衛門風呂でしたが、入浴すると垢が少し浮くでしょう。それをそのままにしておくと、また怒られるんですね。お寺ですから仏教の不殺生戒が生きています。殺すな、盗むな、ウソつくな。三大戒律の第一の「殺すな」とはひとの命を殺すなというだけでなく、その気持ちまでも殺すなという意味であって、汚くすることはひとの気持ちまで殺すことだと教えられました。汚したらそれを除去しきれいにして風呂から上がって来なければならないというわけです。

お二人はいつも境内をきれいにしていましたね。こんな案配でしたが、僕もよく辛抱したね（笑）。ところで、ここは土葬でした。墓場ではそうとう深い穴を掘りますが、以前に埋葬した仏さんが出てくることがあるわけ。それを見たお寺のおばあちゃんが「オレはそういうのダメだ」と和尚さんに言っておったことを思い出します。そうこうしている内に、そろそろ養子縁組の話が出そうだなという感じがしてきたので、お寺から逃げることにしたのです。紹介してくれた校長さんには黙って、そこから一里ほども離れた魚屋さんの二階にさっさと下宿を移しました。

以上は僕の研究歴の、いわば背景とか前史というべき話でした。

（３）「生まれ」と研究歴

前回に触れたように柳田国男さんの民俗学は、宗教教育のうえでも活用しやすいと言えます。とくに俗信教育、兆占禁呪（ちょうせんきんじゅ）あたりですね。これに取り組んだときに「事実の論理」、「宗教の論理」という論文を書きました。これは二つとも『認識の三段階連関理論』に載せてあります。のちに大東文化大学に移ってからは、学生に読ませたりしました。そのうちに宗教を研究したいという学生がでてきたので、『人はなぜオカルトに魅かれるのか』（明治図書　一九九七）を書いて、「オカルト」という狂信的な宗教を通して宗教教育論、ひとつの概論を展開したのです。これで、「認識の三段階連関理論」の内容としては、ほぼ三分の一ができちゃったですな。

宗教教育研究時代を経てのちに昆虫学の古川晴男さんに出会ったときに、「庄司先生は形而上学もやっている昆虫学だ」と言われたことがあります。たしかに僕の宗教及び宗教教育研究は観念論の系譜に位置付きます。だから意識して形而下の方面をとりいれていかないと、研究は全体的にならないと思ってきました。こうした中で板倉聖宣さんや三浦つとむさんが除名された元共産党員であ

ることを知ります。除名というのは研究の発表場所を失うことを意味します。板倉さんの場合は、仮説実験授業を始めて三ヶ月くらい経ってからですね、僕と上迫昭さんが呼び出されて、実は共産党員であったことを告白されます。こうして、僕の中に「唯物論」が入って来るんです。以後、唯物論と観念論の間で研究しつつ、やがて観念論的傾向を帯びるようになります。唯物論の側には入りきれなかったですね。

でも、いっとき唯物論にかぶれて、夏休みに田舎に帰って科学教育論・理科教育論・社会科教育論を実家の本堂で書いたことがあります。本堂は涼しいんです。風は通るしトンボも入って来ます。外の池を見ながら原稿書きをするんですが、背中側には須弥壇（しゅみだん）があってご本尊様が安置されています。なんだか背中あたりがモソモソして誰かにいじられるような気がしてきたので、「いやあ、ゴメンなあ」と思いながら仮説実験授業の科学教育論など、唯物論的色彩の濃い論文をまとめあげたんです。こんなことがあって三段階論のアイディアが思い浮かんでくるんですよ。

まず「非科学」という概念が起ち上がりました。これは、「デタラメ・ウソっぱち」ということではなく、ただ「科学ではない」というだけの意味です。この概念によって自分のなかに既成文化の見直しが起きるのです。たとえば宗教や神秘などは大変な遺産です。それから俗信。日常生活の信仰は教育遺産としても重要なことにだと気付き、内容面を活かした「非科学教育論」ができてきます。さらに仮説実験授業を通して握りとった「科学教育論」。そうすると、「科学以前や非科学以上」という問題意識が生まれてきます。そこで「科学」と「非科学」との中間に「前科学」という段階を位置づけることができます。それは言ってみれば、喩え論、イソップ以来の喩え文化の領域です。これは科学の法則と並び称されるほどの歴史的遺産です。喩えの文化・比喩の文化です。

こうして内容面での三分野ができあがったのです。科学教育論――前科学教育論――非科学教育論というかたちです。三段階論は、単に物の考え方だけではなくて、内容面での特色が浮かんでくる三段階なのです。だから今の学校教育においても非科学教育の遺産は継承していかなければならない、こう考えているわけです。それから前科学において見落とせない内容はコトワザです。これはちょっぴり学校教育でも採用され一般化してきましたが、非科学教育となると小中高では内容になってこない。歴史の時間に宗教に触れるという程度ですね。これではイカンのじゃないかと思います。

それから三段階が互いに「のぼりおり」で思考を発展させるという方面がでてきます。連関理論です。植垣さんの教育実験がこれをばっちりやっています。神奈川県では相当広まっているようですね。今度、そちらの会合で植垣さんがの看護・介護教育における実践報告をされるようです。いただいた会合のチラシを見ると、「学びの救世主　認識論」と書いてあります。また雑誌記事コピーを一読すると、川崎市立病院の介護教生担当課長さんが「のぼりおり」論を雑誌に面白く連載しているようですね。これらの資料からは、一つの理論が普及していく様子がうかがえますね。チラシの方からは、認識論が介護教育における学びの救世主になりうると受け止めている人々の存在がわかり、それを自分なりに理解しようとした個人の成果が連載記事のコピーでしょうね。それから向井さんの校内研究会講師としての三年間の成果、授業におけるのぼりおり三段階論の研究冊子ですね。『恋する認識論』・『疾走する認識論』・『冒険する認識論』の三部作。

僕の場合、お寺に生まれたということが、意識的な認識論（認識の三段階連関理論）の創造と、関連する内容分野の成立に結びついていること、またこの「生まれ」によって研究歴の背景を解釈できるなあと思います。「生まれ」と研究歴との結びつきは、最近なにか運命みたいなものを感じるんですよ。年齢的にも八五歳になって、「むこう」の方に近づいているせいか、歯はガタガタになっているし、・・・僕の話は聞きづらいでしょ。入れ歯を作ってもらったんだけど具合がよくないですね。家内もあんまり調子よくないしね。

（４）教員募集の話

続けて考えるべき運命的なことと言えば、やはり成城に来たということでしょうね。東京にね。そのときは僕、自分から進んで上京したんではなくて募集があったんですよ。当時、成城学園の正門近くには長い煙突が見えて、戦時中はここも軍需工場風になっていたんですね。Ｂ２９の連中がこの煙突を目印に爆弾を落としたのだけれど、はずれて川向こうの初等学校に落ちたんです。校舎は全焼し、それまでの遺産が全部燃えてしまい、僕が成城に来たときは不発の焼夷弾が残っていたり、桜の木の裂け目が見えていたり、それは大変だったことが伺えました。また運動場はサツマイモ畑になっており、僕の最初の仕事は子供たちと一緒にする草取りでした。すごく強い草があってなかなか抜けなかったですね。だけど、「なんで草取りなんだ！」なんて憤慨して、二十分もしないうちにくたびれてしまいました。

当時は、学年は三クラス編成になるときでしたが、疎開先からぼつぼつ帰って来ているとはいえ、子供たちも先生たちもあまり多くはいなかったのです。校長は柴田勝さん。この人は柳田国男先生のお弟子さんですなあ。柳田先生が一番信頼していた人ですよ。何につけ心配事があると柴田さんに相談していたそうです。それに、柴田校長はクリスチャンで先見の明があり、この戦争は負けると思っていたそうです。僕は負けないと思っていたけど・・・。だから当時、一九四五年八月十五日で無条件降伏したあの戦争の性格をめぐって、終戦かそれとも敗戦かが問題になったときには、僕は終戦派でした。イヤア、負けたとは言いたくないというさもしい根性があったんです。

柴田勝さんは秋田出身だから、戦時中は子供たちの半分を秋田に疎開させ、残りの半分を伊豆半島に疎開させたのです。秋田ではお寺さんを借りたそうですが、日の丸の旗は立てなかったという先生でした。そのために疎開先の警察や憲兵に睨まれたんです。職員の菊池喜栄治先生が心配して、お寺の表にだけでも日の丸を立てたらどうですかと進言しても、いや立てなくていいと戦争反対の立場は一貫していたそうです。

戦後この人が校長になって、疎開した子供の帰還は進めなくてはならないし、先生の方は兵隊に取られ帰って来なかったり辞めちゃったりして、新しい先生を求めていたわけです。募集といっても新聞などを利用するのではなく、戦後の新学制が発足したことによって実験学校を看板にする成城学園には見学者が全国からやってきました。校長はその人たちのツテを使って新しい先生を探していたのです。柴田校長からの山形県には適任の先生がいないかとの問い合わせに、豊田小学校へ赴任する際に世話になった教育事務所の渡辺円蔵先生が応じ、次男坊の僕にはちょうど良い話ではないかと、募集の話が来たのです。「それじゃ、行く」ということになったのです。

（５）成城教育への驚きと反発

成城に来た当座、初等学校は爆撃によって何にもなかったのですが、僕は「こういう教育があるものか」と驚きましたね。一斉授業はほとんどなかったです。学校独自のテキストを作り自分で学べるようにしていたのです。自由進度が建て前なんですな。テキストは理科と社会については「研究書」、国語と数学は「学習書」と呼びました。また算数を「数学」と呼び、三年生からの教科になっていました。抽象的な思考は低学年で経験を積んだうえでという理念だったと思います。また英語の教科があり二年生から導入されていました。それから映画の時間、舞踊の時間がありました。いろんなことが自由に取り組まれていたんです。美術は、絵画の先生、工芸の先生、彫塑の先生が三人いました。ああ、こういう学校もあるのかあと思いましたね。それから職員室はなく、「先生の部屋」といって、そこで休憩するだけの場所がありました。丸つけなどの仕事は教室でやった方がいいだろうという考えです。

こういうカリキュラムはちょうどうまい具合に、僕が成城に来た昭和二四年にできあがっていま

した。また大事な教育内容を選択するする基準ですが、それは子供にとって「必要かどうか」、こういうものでした。僕は山形の豊田小で一年半の経験でしたが、そろばん教育などは得意でした。でも成城では計算技能の習得は、将来計算機にとって替わられるからと教えていないと言われたんですが、五年生の担任だったので成城でもやらせてもらいました。デッカイ化物みたいなそろばんを買って始めたんですが、柴田校長がやってきて、「なんでこんなものやる必要があるんだ」と言われたこともありました。だけど、ほら成城には外国からも見学に来るでしょ。誰かが僕の教室においてあった化物そろばんを見てね、一生懸命外国からの見学者に教えているわけ。こんな効用もあるんだわいと思ったものでした。また、遠足もしょっちゅうやっていました。そして運動会は小運動会を一ヶ月おきにやっていましたね。柴田校長は、戦後の教育だからこそ明るい学校・楽しい学校を作りたかったのです。こういう学校だったからね、・・・いや戸惑いましたね。

だから、はじめ僕はケンカ腰でした。なんで算数（数学）を低学年から始めないんだ、なんで自由進度学習をやるんだとかね。でも、やってみるとその良さが分かってきますね。僕の場合、自由進度学習は低学年が一番うまくいきました。子供たちが教室に入ってくると教科書を読み上げます。子供たちが飽きてくると教科書の全文視写です。これにも飽きてくると「いたずら帳」というのを持っていますから、それにお絵かきです。これにも飽きたら教室からすぐ外に出られるようになっていますから「外で遊べ」という具合でした。ここにいる武田さんは高学年で自由進度学習を成功させたんです。成城教育は今でもあまり変らないようです。

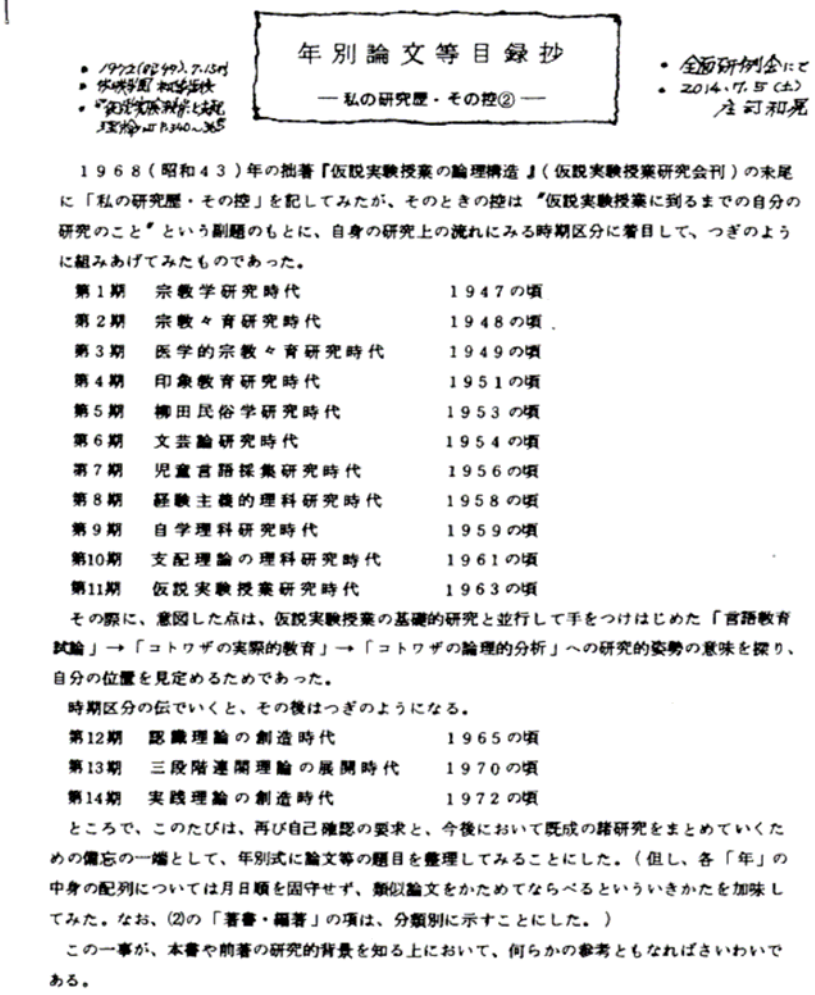
だから僕も自主的に遠足、散歩、ものつくり、食べられる草を探して食べるなどやりました。あるときは、南部線の電車に子供たちを乗っけて鶴見まで行ってお寺で遊んで、石碑をつくるさまざまな石を見学して帰ってきたこともありました。南部線に乗っているとき、プロ野球の巨人軍の著名な監督を見かけたこともありました。僕の方はさっぱりでしたが子供たちの方がよく知っておったです。

（６）子供を知る楽しみ

こういう学校に勤めて三、四年苦しんで、「成城で学び得るもの」（一九五五）を書きました。そして抹香臭い方はひとまず棚上げして、今度は子供のコトバを中心に取り組むようになったのです。資料を二つ配ります。（・・・映画の時間の話ですが、学校の近くには東宝・新東宝・大映各社の撮影場が近くにあり子供たちと何回か見学にいきました。俳優の佐分利信などは祖師谷大蔵のほうに住んでいるとか、映画監督の黒沢明さんの娘さんが初等学校に通っているとかを知りました。通用門に娘の迎えに来ているのはお父さんだなあ、とかの思い出があります。鑑賞した映画で感激したのは、山口淑子主演の『暁の脱走』でした。今でもときどき見ることがあります。僕は映画が好きでよく映画館に通いました。）さて、資料ですが、

資料１：「年別論文等目録抄――私の研究歴・その控え②」(2014.7.5)
＊Ｂ４、１０枚
＊初出：『仮説実験授業と支配理論』（成城学園初等学校　1972.7.15）p340~365
資料２：「児童言語採集研究時代（第７期）あたりの話」(2014.7.5)
＊Ｂ４、４枚

資料１（次頁　１枚目の前半）は、前回は概論のような話をしましたが、僕の研究歴を少し整えたものです。どの時期に論文その他の文章を書いて置いたかが分かるように番号をふり、どの冊子（単行本）に掲載されたかが分かるようにしてあります。若い頃から書くことが好きだったので整理し



年別論文等目録抄

— 私の研究歴・その控② —

• 全国研例会にて
• 2014.7.5(土)
庄司和晃

１９６８（昭和４３）年の拙著『仮説実験授業の論理構造』（仮説実験授業研究会刊）の末尾に「私の研究歴・その控」を記してみたが、そのときの控は〝仮説実験授業に到るまでの自分の研究のこと〟という副題のもとに、自身の研究上の流れにみる時期区分に着目して、つぎのように組みあげてみたものであった。

第１期	宗教学研究時代	１９４７の頃
第２期	宗教々育研究時代	１９４８の頃
第３期	医学的宗教々育研究時代	１９４９の頃
第４期	印象教育研究時代	１９５１の頃
第５期	柳田民俗学研究時代	１９５３の頃
第６期	文芸論研究時代	１９５４の頃
第７期	児童言語採集研究時代	１９５６の頃
第８期	経験主義的理科研究時代	１９５８の頃
第９期	自学理科研究時代	１９５９の頃
第10期	支配理論の理科研究時代	１９６１の頃
第11期	仮説実験授業研究時代	１９６３の頃

その際に、意図した点は、仮説実験授業の基礎的研究と並行して手をつけはじめた「言語教育試論」→「コトワザの実際的教育」→「コトワザの論理的分析」への研究的姿勢の意味を探り、自分の位置を見定めるためであった。

時期区分の伝でいくと、その後はつぎのようになる。

第12期	認識理論の創造時代	１９６５の頃
第13期	三段階連関理論の展開時代	１９７０の頃
第14期	実践理論の創造時代	１９７２の頃

ところで、このたびは、再び自己確認の要求と、今後において既成の諸研究をまとめていくための備忘の一端として、年別式に論文等の題目を整理してみることにした。（但し、各「年」の中身の配列については月日順を固守せず、類似論文をかためてならべるといういきかたを加味してみた。なお、⑵の「著書・編著」の項は、分類別に示すことにした。）

この一事が、本書や前著の研究的背景を知る上において、何らかの参考ともなればさいわいである。

てみたのですが、向井さんあたりは冊子作りが好きで今では百冊くらいはあるんじゃないですか。僕はそれほどではないけれど整理して残して他と交流したいと思っていたんですな。さっそく、「第７期　児童言語採集研究時代（１９５６の頃）」に突入してみたい。

僕はこういう、子供のコトバなどを集めたりすることが楽しみだったんです。子供はこういう発言をするのかという発見が楽しかったんです。メンコ遊びが流行ると、子供たちはもう止まらないんですな。ここの学校はそういうのは禁止事項ではなかったもんですから、二十分の中休みになると、ドーッと外に出てメンコやっていました。こういうのを見ていてね、子供にとって「休み時間」とはそんなに楽しいのかということがよくわかりました。始業の鐘が鳴ると、子供たちからすれば「何でこんなに早く鳴るんだ」と思ってるから、ゆっくり教室に入るわけ、僕もだったね。何をするにせよ面白いんですよ、ここは。だから、今でもそうでしょうが、研究には値する学校だったんだと思います。子供を知る楽しみ、それに文章を書いて発表する楽しみ、これを冊子にまとめていく楽しみ、つまり楽しみながら仕事ができたんです。

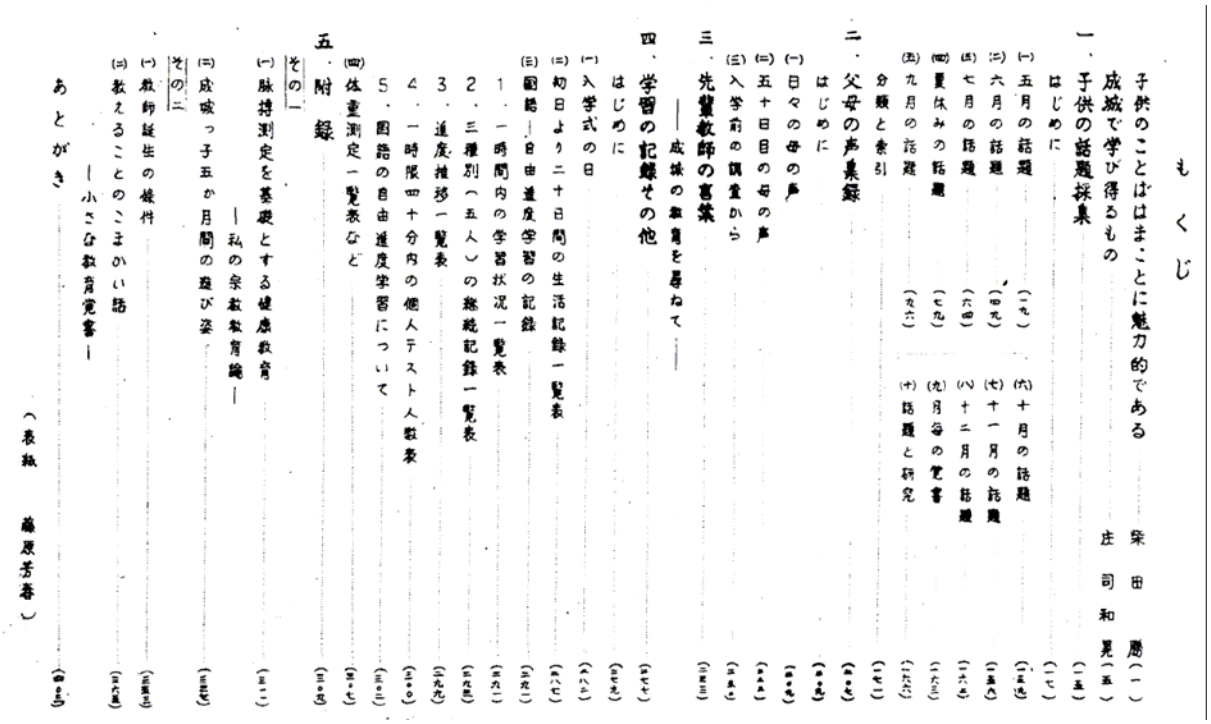
成城では一年生を四回担任しました。田舎では五年と六年、成城に来て最初も五年と六年生で野球やったりして楽しかったんですが、一年生を担任すると、もう右も左も分からないし心配だけど、実に精神的に意欲満々になりますね。入学する一年生は、付属の幼稚園から来る子、家庭から来る子といろいろでしたが、柳田さんに言わせれば、「一年生は家（うち）の教育を背負ってくる」んですな。当時は幼稚園を経由しないで家庭の方から来る子が多いくらいでした。こういう点からも子供のしゃべるコトバは非常に気になりますね。

それで、『一年生という子ども』（成城学園初等学校　一九五五）をまとめ上げてみようと思ったんです。低学年は二年生くらいになると校長の方からどんな研究をするのか、担任にテーマを訊い

てきます。そこで担任は一年生をもっているうちに記録を採ろうとするわけです。僕も先に自覚して記録をとって研究してみました。それをまとめたのが資料２（前頁）です。僕の最初の単著です。表紙の絵は清原そういちろう君という子が描いてくれたものです。だいぶ経つのに紙質はまだ大丈夫ですな。総ページ数が四〇二です。この本をまとめる以前に、柴田校長に、「子供たちがどんな話題でしゃべっているか記録してみたら・・・」とアドバイスされ、それが子供の言語研究の始まりでした。

（７）文章を書いて発表する楽しみ

資料１の「目録抄」の２～３枚目（省略）に列挙してある論文等（昭和３０年分）に〇印のついているのがこの本に収録した文章です。そのあとは、「子どものコトバと行動」という題で、うまい具合に雑誌『学校劇』（国土社）に連載できた文章がありますが、これが一年生という子どもについての締めくくりになります。こういう記録と研究をまとめようというのが楽しみだったのです。だから向井さんの冊子つくりの楽しみもよく分かります。また彼は作り方が上手です。必ずまえがき・あとがきが書いてありますね。これらで冊子の趣意や自分の現在の関心などを記録していくんです。


もくじ

子供のことばはまことに魅力的である　柴田　鷹（一）
成城で学び得るもの　庄司和晃（五）
一、子供の話題採集
はじめに（一七）
(一)五月の話題（一九）
(二)六月の話題（四九）
(三)七月の話題（六四）
(四)夏休みの話題（七九）
(五)九月の話題（九六）
(六)十月の話題（一五九）
(七)十一月の話題（一五九）
(八)十二月の話題（一六九）
(九)月毎の覚書（一七三）
(十)話題と研究（一九六）
分類と索引（一七二）
二、父母の声集録（一〇九）
はじめに（一〇九）
(一)日々の母の声（一〇九）
(二)五十日目の母の声（一〇九）
(三)入学前の調査から（一〇九）
三、先輩教師の寄稿（二四三）
――成城の教育を尋ねて――
四、学習の記録その他（一七七）
はじめに（一七七）
(一)入学式の日（一八八）
(二)初日より二十日間の生活記録一覧表（一八七）
(三)国語――自由進度学習の記録（二九二）
1、一時間内の学習状況一覧表（二九一）
2、三種別（五人）の継続記録一覧表（二九五）
3、進度推移一覧表（二九九）
4、一時限四十分内の個人テスト人数表（三〇〇）
5、国語の自由進度学習について（三〇二）
(四)体重測定一覧表など（三〇七）
五、附録（三〇五）
その一
(一)脈搏測定を基礎とする健康教育（三一二）
――私の宗教教育論――
(二)成城っ子五か月間の遊び姿（三三七）
その二
(一)教師誕生の條件（三五三）
(二)教えることのこまかい話（三六五）
――小さな教育覚書――
あとがき（四〇五）
（表紙　藤原芳春）

さて、僕の『一年生という子ども』の方です。資料２（上）に載せた目次をみると、最初に先に触れた「成城で学び得るもの」（一九五五）を置き序説にしてあります。これは『庄司和晃著作集　第５巻　教育者としての青春』（明治図書　一九八八）のｐ７１～７８に載せてあります。

この「成城で学び得るもの」の要点について話をすると、まず「成城は開眼道場」だと言われるくらい、ふつうの小学校では問われることがなかったことが意識化されていたのを思い出します。たとえば、教科の始期をどうするかです。数学はいつから始めるのがいいか、作文はどうか、など学習を始める時期の研究です。次に情操教育が重視されていました。劇・舞踊・映画・美術などですね。さらに低学年教育の特異点です。徹底して個人指導がなされていたことです。最後は学習法の特異点。これは先に触れた「自由進度学習」形態の工夫のことです（前掲書参照）。

要点の二つめは、「見るものから働くものへ」という教員としての一転機です。「見る」すなわち成城教育を客観視する立場が砕かれちゃって、成城教育を担う一人として「働くもの立場」への転

換です。

三つ目の要点は、「指導型より反応聴取型へ」という授業研究の心構えの一転機です。「指導型」、すなわち教えることのみ急で、内容を如何にかみ砕いて納得させるかをメインに研究するパターンから、与える内容が子供に適するか否かを考えるようになったという転換です。

要点の四つ目は、「提案法の転換」ですな。これは新しい教育内容を提案するときに必要な形式（手続き）です。①時間として特設すること、②学習材料のまとまりつまり単元として位置づけること、③一つのパンフレットとしてまとめること、④プリントとしてまとめること。これらのいずれか一つでもしっかり把握して提案することをやっていくんです。これは自分の教師としての力量を養う有力な方法ですよ。

要点の五つ目は、「原案主義」を学んだことですな。職員会議などで提案する時は、「私はこう考えているのだが」などと発言しても、そのまま受け取ってはくれません。だから形を添えて提案することです。そうすれば、とことんまで批評してくれるのが成城の職員会でした。

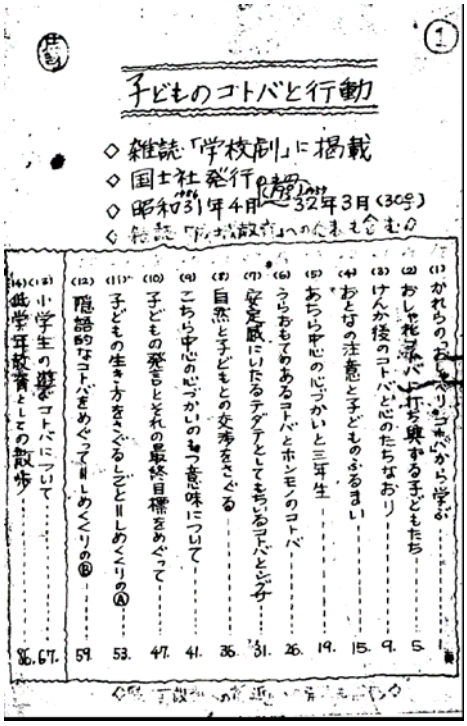
六つ目の要点は、「必要論から生まれる教育」。新しく教育実験を試みるとき、まずやってみることです。理由はあとからついてきます。

要点の七つ目は、「具体から抽象へ」です。これはいうまでもありませんね。具体から出発なくして教育に進歩なし、です。でも、抽象的な思考法の意義を忘れてはいけない。

最後八つ目の要点は、「実際から理論へ」です。成城学園の創立者・沢柳政太郎氏の『実際的教育学』に基づく理念です。成城における「低学年理科教育」や「散歩」が教科として位置づけ、すなわち目的、教材の選択範囲、取り扱い方法、カリキュラムの確立などが形をなしてくるのに、どちらも十五年以上の年月を要してきました。

（8）子供コトバの「採集」

さて、目次（前頁）に戻りましょう。第一章は「子供の話題採集」です。一年生のものはこの本に載せてありますが、二年、三年、四年生の分は資料２の三枚目に採集ノートの表紙をコピーしておきました。ここで大事なのは子供言葉の「調査」ではなく、「採集」ということですな。柳田民俗学でいう「採集」と同じです。でも成城の菊池喜栄治さんが昔の地理教育でやったという説もあるんですね。私の「二年生の口言葉」の採集ノートは今二六冊あります。三年生の分が二五冊。四年生で十一冊。採集は十年くらいやりましたかな。当時このノートは十円でした。これをポケットに入れて子供がいましゃべるなあというときに、そのまま記録したんです。


子どものコトバと行動

◇雑誌「学校創」に掲載
◇国土社発行
◇昭和31年4月～32年3月（30号）
◇雑誌「教育」への連載も含む

(1) かれらのおしゃべりコトバから学ぶ……1
(2) おしゃれコトバ打ち棄ずる子どもたち……5
(3) けんか後のコトバと心のたちなおり……9
(4) おとなの注意と子どものふるまい……15
(5) あちら中心の心づかいと三年生……19
(6) うらおもてのあるコトバとホンモノのコトバ……26
(7) 安定感にいたるテダテとしてもちいるコトバとどげ……31
(8) 自然と子どもとの交渉をさぐる……36
(9) こちら中心の心づかいのもつ意味について……41
(10) 子どもの発言とそれの最終目標をめぐって……47
(11) 子どもの生き方をさぐることII しめくりのⒶ……53
(12) 隠語的なコトバをめぐってII しめくりのⒷ……59
(13)(14) 小学生の遊ぶコトバについて……
低学年教育としての散歩……67

成城学園はかつて自由に出入りできたもんだから、柳田国男さんなどは、正門から学園内の川を越えて初等学校までよく散歩にやってきました。僕などが子供の話題採集をやっていると、「それは、いいなあ」なんて言って、ここは誤解されているようだけど、「騒音も集めるといいですよ」とアドバイスされたこともあります。

休み時間になると、運動場あたりで子供らの騒がしい音が聞こえてきますね。柳田さん言うところは、こういう場面でこそ、家庭教育以前の言葉が染み出てくる。子供はいろいろなものを背負ってきているはずなんだから、

という考えです。そこを見ていくことを重要視していたんですね。これを教育論としていえば、「教育しすぎるな」ということだったのだと思います。また、柳田さんは授業を見ることを嫌がったですな。参観したりすると、子供たちがすぐに姿勢を正したり先生は固くなったりして本来の姿が見えなくなるからというのです。見るにしてもソーッとですね。

僕は「騒音」と言われてよく分からなくてね、採集ノートを出して聞こえて来るあらゆる声を記録しようとしました。現代のように子供の騒音を録音しコトバだけを抽出できる機器があればよかったですな。しかし、騒音からコトバだけを集めるのは困難です。試みて分かったのはね、子供たちはいかに汚い言葉、ボロクソの言葉を使っているかということです。野球なんかやっているところでは、「なにやってんだー」「どこ見てんだよー」とか、すごいのは「死んじまえー」なんてごく普通に聞こえて来ましたね。こういうのを採集するしかなかったんです。

（9）採集ノートの実際

資料２の四枚目（省略　以下に講義の中で一部を読みながらコメント）には採集ノートの実際例を載せておきました。その下に「４年生の口言葉の採集ノート①から」を見て下さい。昭和三十二年四月九日の記録。以下（　）内はその時の状況メモ。△は採集者（庄司）の口言葉。＊は講義中のコメント。

・きょうは「絵」（の時間）だね
・そう
・ああ　そうか
・それは道理だね
＊「道理」なんて言葉（漢語）は、四年生ではこういう風に出てくるのか、こう思いましたね。次に、同年四月五日のページ。

（ヤゴを見て）
・これだろう
・うん
・ヨツボシトンボ
＊今までのトンボ・カブトムシなどというのとは違い、図鑑でもっと詳しく見ていこうとしてるんですね。それから右側の「３年生の口言葉の採集ノート①」を見て下さい。新学期四月のはじめです。

・こんど　だれが入ってくるの
・へえー　やすひこくん　やめちゃったの
＊ここは私立学校だからやめていく子もいれば入って来る子もいるんです。

・もう　かねなった　？
・どう　すんの
△いつも　の　とおり
△さあ
△むこうに　ならぶ　の

・あのね　せんせい
・学級文庫　たいがい　よんじゃったでしょう
・だから　あの、学級文庫　一冊ずつ　もって　きたら　いいじゃない
・一冊も　ない家って　ないでしょう
＊「たいがい」とか「だから」とか、完結する物言いは、こういう形で出て来るんだなあ。その上、「２年生の口言葉の採集ノート①から」を見ます。四月五日。

（始業前）
・せんせい　おたまじゃくし　どうした？（三人手をつないで）
△はなしちゃったあ、いけに
＊もうオタマジャクシは池で山ほど獲れたからね、僕が池に放してやったんです。

・わあ　たのしみに　きたのに　ね
・かえって　いたか　と　おもって　きたのよ
・なぜ　すてたのよ　ばか！
（そこには相当の手続きのあることを知らない）
・ぼうし　どこに　かける　？

△どこでも　いいよ
・なぜ　なぜ　なぜ　　（なぜなぜ居士）
＊「なぜなぜ居士」みたいな子が出てくる（笑）。次は、「絵になる」とかいてあるところ。

・下に　おりてください
・すわって　ください
・この電車　こわい
＊むかしは学校に「箱ブランコ」というのがあって、今は危険だというのでやめてしまいましたが。
・いま新宿
・下北沢　とおるの
・経堂　成城学園いこうか
・みんな　ならんでいてー
・順平のとこに　ならべ　ならべ
・乗る　お客　ならべ
・新宿
・降りて下さい
・おりません
・ならんで下さい
・ピー
・湯本まで通過
・あまり　こぐなよ
・とびのり　きけん　です
・のっけて　下さい　な
・ゆもと　ゆもと　ゆもとで　ございます
・新宿ゆき
・おりて
・ならんで下さい
・ならべって　さ
・発車
・新宿まで　通過
・まだ　まだ　いけません
・新宿　？
・下北沢
・このつぎ新宿です　南新宿通過
・京王線に・・・・
・おりてください
・新しいお客
＊こうやって、ずーっとしゃべりながら遊んでいるわけ。ここで僕は、ああ、子供っていうのは、遊びにもストーリーを考え、一人ひとりが役になりきって演じているんだな、ということが分かったのです。それから同じ日の始業前。

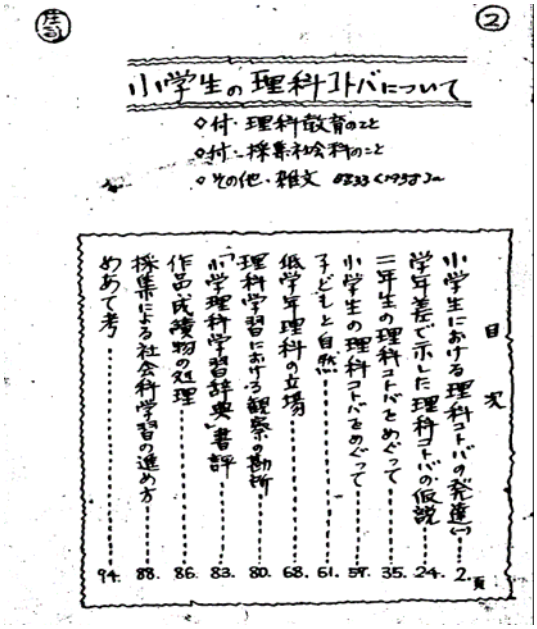
・あたし　の　てがみ　とどいた？
・新潟に　行ったのよ
・先生　休み中　に　来たでしょう
・あたし箱根に行った　のよ
・いつ　かえった　か　わかる　？
＊こういう子供いますね。

・おい遊ぼうぜ
・砂場に　いこう
・うん　洗面器　を　もって　いくよ
・ぼくも　いれて
・いやだ
＊僕もそばにいて一緒に遊びながら、
△きみもやったら　どうだい（ぼんやりしている子に）
・手よごれる　から　しちゃ　いけない
△よごれたら　洗えば　いいじゃないか
・洗って　おちなかったら？
△石けん　あるでしょう　あれで　洗って　やるよ
・石けん　で　おちなかったら
△コガタナで　けずって　やるよ（じょうだんで）
・けずっても　おちなかったら
＊コトバ遊びみたいに楽しんでいるんですね。「才走った子供」、「家庭のこと」を感じました。

（10）遊びコトバと理科コトバの発見

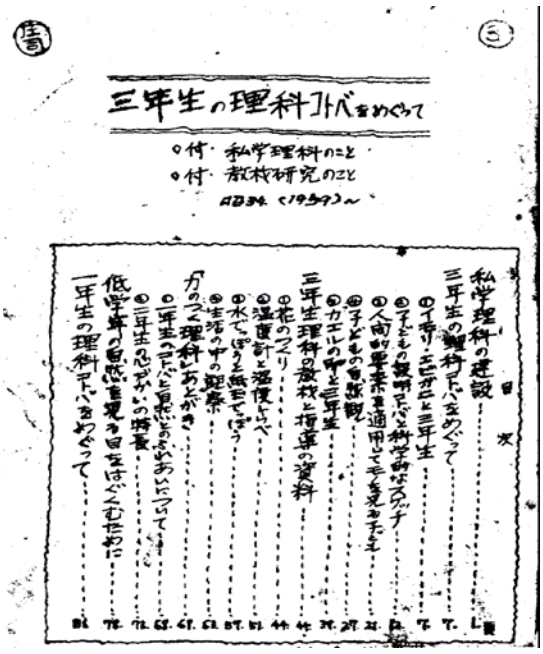
こういう採集をやりながら、柳田さんに示唆された「騒音集め」を試みている間にですね、「遊びコトバ」というのと「理科コトバ」という大きな道をみつけるんです。「遊びコトバ」とは、遊び中には特有の言葉が発生するんだということなんです。たとえばメンコ遊び。これには三百近くの特

有の言葉をみつけました。三、四人でメンコを出し合う場合に、みんなで頭を上げてヨイッショと打つ場合を「あたまペッチャン」。みんなで腕を上げて打ってだすときを「うでペッチャン」。それぞれの肩を揃えてあげてヨイショと打つ場合を「肩ペッチャン」などと、自分たちで遊びに特有の言葉をつくっていくんです。メンコ遊びの始め方（儀式）を表す言葉なのです。五、六年生を集めてメンコ遊びの系列だけを観察すると、二、三百も出る場合もあれば、別の日には五十くらいしか出ないこともありました。つまり、遊びコトバには消長があるんです。



こういう採集記録を、外部に発表してみようと思い始めてみたのが、「理科コトバ」でした。これは散歩の時間とか遊びの時間があるものだから、たとえばトンボとか見つけますね、すると自然との接触するときの言葉が出て来ます。どんどん集まってきます。だから僕は三年生の「私学理科」を作ろうと思ってやったんです。たとえばイモリね。子供たちはイモリについてどんな話をするんだろうか、と疑問に思ったわけ。これは良かったね。

僕は家でもイモリを飼ってみました。というのはね、いまのテレビ朝日は創業の頃は「日本教育テレビ」という社名だったんです。だから教育番組も少しはあったのね。僕がその番組の制作部員になっているときのこと。戦前に奥多摩に小河内ダムができるときに移築した民家（宿屋）が、僕に住んでいる街にあったんです。これがもうその頃は化物屋敷みたいになって、もう潰して撤収しようというときでした。そのとき建物のあたりからオニグモがわーっと出る、ジョロウグモが出てくる、ヘビも出てくるので非常に面白いという話を聞いたので、行って僕もイモリを捕まえて飼ってみることにしたんです。家で飼っていると、夜な夜な部屋まで這い上がってきてね、布団の中まで入ってきて騒いだことがありました。ホントよく家内が我慢したものです。



イモリはとてもいい教材です。子供をとくに惹きつける動物というものがいるんです。イモリについて子供たちはどんなことをしゃべるか、「おしゃべりメソッド」と名づけてやってみようと思ったわけです。板倉先生に相談したら、「チャッタリング・メソッド」がいいでしょうと言われましたが、まあ子供たちに動物を見せてしゃべらせる方法であることは同じです。いや、しゃべりますねえ。低学年はあちら（イモリ）中心でイモリになりきってしゃべりますね。「ウワーッ、おれの方を見てる！　逃げろーッ」なんてやってるんです。これが中学年あたりになると、少し静かになって、「いやあ、水かきもないのに、よく泳ぐなあ」なんてよく見てしゃべってますね。

こういう経験から「理科コトバ」を探っていったのです。さらに「手さぐりメソッド」などを創案して、自然を探りながら、子供たちの「理科コトバ」を採集していきました。

(12)「子供の方言つくり」というアイディア

今度は、柳田さんが注目する方言です。これをやってみるんです。ところが東京とはいえここは郊外でしたから、方言もあまりはっきりしない。ならば、子供たちが方言を作ることができないかどうか試してみようと思ったのです。「方言つくり」です。手作りの日本語というのは寂れているからね、この方向（視点）から考えたんです。それで方言教育のだいたいをやってから、その展開としてアリンコの方言つくりをやったのです。これは呼び名ですね。この呼び名つくりが、のちに認識論研究に参入したとき、名づけが概念化の問題に結びついていくんです。

そのまえにね、柳田さんが集めた方言を比べて「これは子供がつくった方言にちがいない」と書いてあるのを読んだんです。そこで、僕は逆に子供たちに言葉を造らせることによってね、その柳田さんの発見との一致点を確かめたのです。それで初めて、柳田国男さんの児童観の一つとして、昔の子供たちも日本語つくりに参与していたのだ、つまり「子供の造語能力の発見」という特徴を浮彫りにできたのです。もう一つは、子供は昔を保存するという、「子供の過去保存的能力の発見」でした。これは大学でも取り上げましたが、『科学ばっかり主義の克服』（明治図書　一九八六）でも展開しました。口言葉の採集は、今度は決まり文句に注目することになり、それがコトワザの発見に結びつき、コトワザ教育学を成立させたんです。

Ⅵ　小学生の言語生活とその考察 …… 277
　1　小学生の遊びコトバについて …… 277
　2　メンコ遊びの用語と消長の足どり …… 288

Ⅶ　子どものコトバと行動についての諸考察 …… 299
　1　子どもの世界の苦しみと楽しみ …… 299
　2　おしゃれことばに打ち興ずる子どもたち …… 302
　3　けんか後のコトバと心のたちなおり …… 306
　4　おとなの注意と子どものふるまい …… 311
　5　うらおもてのあるコトバとほんもののコトバ …… 315
　6　安定感にいたるてだてとしてのコトバとしぐさ …… 319
　7　子どものコトバの中に折り目をさぐる …… 324
　8　こちら中心の心づかいのもつ意味について …… 328

Ⅷ　自然との交渉にみる子どものコトバ …… 333
　1　一年生の自然交渉にみるコトバの示すもの …… 333
　2　二年生の自然交渉にみるコトバの示すもの …… 350
　3　カマキリと子どもとの間 …… 362

〔昭45（1970）『コトバからの発想と認識理論』の下巻の目次〕

資料２の二枚目にあるように、自分で発表したのをバラバラに散らばらないように、製本して一冊にしたものの表紙コピーです。そこには『子どものコトバと行動』、『小学生の理科コトバについて』、『三年生の理科コトバをめぐって』の三冊、それから『コトワザの論理と認識理論』（成城学園初等学校　一九七〇）に載せた子供の口コトバについての考察です。これらは子供の口コトバを通した僕の子供研究ということになります。

ここで一つの発見だなあと思ったのは、先生としゃべっている子供の言葉自体、たとえば「先生、遠足いつ行くの？」なんて言って来るでしょう。それに応対していると、ほんとうは遠足に行く日を訊いているんじゃないことに気付くんです。この子は僕の愛情を求めているんだなあとわかってくるのです。こなると、ピアジェの研究の、子供の言葉に見られる社会性という議論だけでは発見できないぞ、と思ったのです。コトバそれ自体の内容ではなく、それを通して伝わってくる思いが先走っていることだと分かってくるんです。つまり、子供のコトバを採集し研究しているうちに、子供研究には「愛情要求のコトバ」という大きな分野があるぞ、ということを出したんです。今回はこのくらいにしましょうかね。

質疑応答

- （小田）先生がまとめた「子供のコトバ」研究の中で、柳田に見せたものはあるんですか。
- （庄司）見せなかったです。柴田校長には見せたのだけど、当時はそういう才覚はなかったんだね。柴田さんが柳田さんにみせたかどうかも知らないですね。ただ、柳田先生が亡くなってから、ああ、訊きたかったなあというのはいっぱいあるわけ。先生の「蟻地獄と子供」など方言研究があるでしょう。「方言周圏説」よりも、ああいうのがいいです。一つひとつの方言の記述に非常にリアリティがあるヤツに注目したんです。これと、僕のまとめたアリンコ、カマキリ、イモリ、アリンコ、アリジゴクなどの子供のコトバと比べてね、子供が方言成立に参与しているという柳田さんの説が、本当かどうか疑問だったわけ。そのことが確かめられたので、やはり柳田さんに話したかったね。
- （小田）柳田には「蟻地獄と子供」のほかにも、「蟷螂（とうろう）考」とかいい文章がありますが、庄司先生の実践記録を見たら、柳田はとても喜んだんじゃかいかと思います。
- （庄司）ほかに「西方はどっち」あたりがいいですね。あのへんは、理科コトバ・理科教育・原始人的理科教育（自然教育）の成果だと思いますね。柳田さんのあそこでの分析が大切だと思って、遠野のほうで後藤総一郎さんがまとめられた関連冊子を取り寄せたことがありました。新書版くらいのを二冊ね。柳田研究者の後藤さんが方言研究（子供のコトバ）方面にまで関心を抱いてくれていたのかと思い嬉しかったのです。近頃は日本語がさみしくなっているでしょう。だから、創作コトワザなど「創作」に力を入れてきたわけね。なにも全部共通語化して全国版にならなくても、言葉っていうのは俺たちが作ってきたものだという自主性の回復・主体性の回復なのです。名前（呼び名）に対する主体性の回復・コトワザに対する主体性の回復を図らないといけないんじゃないかと思いますね。これを方法論として教育実践に繰り込んでいけばいいんです。たとえば、教科書の文章などだれがつくったのか分からなくなってきていますが、意識的な「創作」という観点は、既成（教科書）の文章を見返す目が養われるキッカケになると思いますね。たいてい、ひとつの学問が成立するときは、独創的な言葉（術語）が生れてきます。大人の場合だと定義をつける必要があるけれども、子供は自分の好きな名前をつけていけばいいんですね。
- （小田）さきほど、庄司先生が柳田に「騒音集めるといいですよ」と言われた話が出ましたが、そのことが誤解されて受け取られていると聞こえたのですが、これはどういうことでしょうか。
- （庄司）成城時代、僕が柳田国男さんと交流があったという場面での話で、山梨の杉本仁（柳田国男研究会）さんが、『柳田国男と学校教育』（梟社　二〇一一）の中で「騒音」を集めるのではなく、「ことば」を集めると書いてあったからです。僕の話がうまく伝わらなかったんです。騒音の中には、子供の「コトバにならない思い」が何気ない態度や、無意味に思える一言などに表れてきます。ここを掬い取ることがポイントだったのです。まあ「騒音」を記録するっていうのは難しいですよ。柳田さんに集め方も訊かなかったし、エライ人が子供の口コトバの採集自体を評価してくれたから、それで満足しちゃったんだね。柳田さんが学園内に散歩に来ますね。でもここは広いから途中でくたびれるでしょう。そんな折りに、二重マントを脱ぎながら話してくれるわけですよ。せっかくチャンスは何遍もあったのだけど、残念ながら何かを訊

いてみようという器量は持たなかった。

- （小田）「騒音」に対する柳田の趣意ですが、どちらかというとコトバにならない領域にも注目しなさいということですか。
- （庄司）そうだね。アー、ウーとかね、コトバ以前のコトバでしょ。だからね、今だと騒音を分析する人がいるでしょう。そのときの機器があれば良かったのにと思ったわけ。だから、「騒音」のなかに混じっている言語発生とか、教育の入らない段階のコトバとかが見つけられるんじゃないかという趣旨だったのでしょうな。言葉の「生の姿」を解明できる道ができるかもしれない、とね。
- （小田）子供たちが集団でいると、声ともコトバともいえないウオーンという音が聞こえてきます。柳田はこの騒音の背後にあるコトバにならない声も大事だよといいたかったんでしょうか。
- （庄司）そういうつもりだったんでしょうね。
- （尾崎）基本的なことですが、昭和二四年ですか、成城で教員募集があったとき、先生が「（ならば）行ってみよう」思った決定的な動機とはどんなことでしょうか。
- （庄司）一年半（1948.4～1949.8）になる山形の小学校教員をやってきて、自分でも行き詰まったなあという経験があったからです。ほかの二学級はベテランの先生がやって、残りの一学級は新任で僕が受け持ったんだけど、「申し送り」されていた子供が四人くらいおったんですよ。モノを盗むとか、担任に悪いことをするとか、またナイフをもって鞄を切り裂いて歩くことか、僕もきりきり舞いだったわけ。それで、だいたい治まったなあという段階がやってきて、これ以上は大変だなと思っていたところに、募集の話があったんです。やはりそれが運命だったんだね。柴田校長が募集の話を、勤務校の管内に依頼しなければ、人生はまた異なっていただろうし、僕も成城学園を研究して来たのではなくて、ここがだめだったら、ナニ、八丈島の先生にでもなってやろうかなと思っていたわけですよ。それが成城に惚れ込んでしまって結局、年度で言えば二九年（1949.9 赴任～1977.3 退職）勤めました。
- （尾崎）山形の小学校の、環境や子供や先生の様子、これと東京の成城学園のそれらとの違いはどう感じられましたか。
- （庄司）成城という地域自体じたいは東京都といっても田舎だったね。風景的には新宿までは山形と変らないくらいにね。でも、決定的だったのは学園の規模だね。四万坪という広大な土地の中にある小学校という点。世田谷区の砧支所に譲ったからすこし減ったけれども壮大な学園ですね。いまではだんだん自然が少なくなってきちゃった。以前は、ドングリはわさわさ落ちるし、ドングリは芽が出て根が生え新しいものがいっぱい生えていたんだけどね。

　山形の教員時代の話は、「教育者としての青春」（『庄司和晃著作集第５巻　教育者としての青春』明治図書　一九八八）に書きましたが、子供の育ちの変容はその山場・切れ目というときがあるでしょ。それを自覚したときに、以前の姿が客観的にその要点が見えてきますね。学校の先生たちの雰囲気もそうです。成城学園の先生たちには、進取の気性に富んだ人たちがかなりおったですな。いまの学力中心ではなく、かつての「ゆとり教育」はよかったですよ。あの教育で伸びた先生がかなりいますね。それが世界的な学力検査の結果、日本の子供の学力が落ちたということで、「ゆとり教育」をやめて、「基礎基本」を重視する方向に転換した。だけど、

これを強調すると教育実践はしぼんじゃうね。でも一部まだ残っているでしょ。郵便局に見学にいくとか、ああいうのが教育としていいんです。そんな雰囲気の中で、先輩教師のコトバは光りますね。成城では先輩先生の教育論をいっぱい聴き、記録に採りました。成城の先輩先生は研究に値する人たちばかり。だからテレビにでてくるような有名人でなく、いわゆる凡人といわれる人々の中にはほんとうの実力を備えた人が各分野に必ずいるんです。そういう人を発見して、その生き様を記録していけば、学べることは大きいと思います。とくにその発言に注目して見ていくとまた効果的だと思いますね。

子供についても言えます。三歳ころから五歳へかけて子供はたくさんしゃべり始めるでしょ。あの頃というのはほんとうに「初源の相」が出ているんです。たとえば、太陽が雲に隠れているじゃない、それが出てくるときなど、「お日様が出ちゃったあ」なんてつぶやくでしょう。こういうのはいいね。いつだったか、学園の幼稚園でテレビ見ているときにね、「ネコ踏んじゃったら　どうする？」なんてテレビが訊くわけ、逃げるか噛みつくかもしれないんだけど、五歳児だったか、「痛い！」と大声あげるのね。実に独創的な、教育の入っていない日本語習得の「初源の相」が現われるわけ。魂のコトバを出すんですよ。こういう経験を積んで人の心がわかってくるんじゃないでしょうか。こういう子供の言葉を集めなかったら、文学だけでは、やはり子供の「魂のコトバ」の発見はなかったかもしれない。コトバの後ろには、満々たる感情・気持ち・気分、そういうのがこもっているんだなあと思うわけ。だから本当はコトバだけでは分からないのです。さっきの資料２の二枚目にもあるけれど、二年生が「あたし（休み中に）箱根に行ったの　いつ帰ったかわかる？」なんて僕に訊いても分かるはずないんです。でもそういうふうに言いたいという気持ちの裏の方でいったい何を言っているのか、ピッピッと響いてくれば、そのときの子供が「わかった」と言えるんじゃないでしょうか。

ロコトバは三年生までは実に丁寧にやったね。四年・五年・六年になると中学生みたいに、俺たちと同じようなしゃべり方をしてきます。理論的な話もします。七五三を経て十で神童、これを過ぎると、僕の関心も薄らいできますね。まあ関心のあるところで楽しんできたわけです。自分の発言したもの・書いたものは棄てない。

- （徳永）話を変えちゃっていいですか。お話の中で低学年では経験が少ないから抽象的な数学の学習は三年生から始めるんだという「教科始期の問題」がありましたが、成城でははじめからそうだったのですか。
- （庄司）ハッキリ分からないが、僕はその説を半分しか信じていません。抽象的なことでも先に形式（言葉）だけ暗記してからでも、あとから概念はついてくるということがあります。たとえば「犬もあるけば棒に当たる」の裏の意味が分からなくても、あとから分かってくるというのはいくらでもありますね。小倉百人一首でも憶えておくだけでいいわけでしょう。何かの拍子で深い意味に気付くということがあります。だから抽象的な数の概念を一年生でも獲得できるのではないかと思って、裏付けをとるために、割り箸を大量に買ってきて、一対一の対応ができるかどうかやってみたことがあります。１．２．３．４・・・とやってみてね、それができる頃になったら算数を始めてみたらどうかというような提案をしたことがあります。一番大きい問題は、成城教育の「必要論から生れる教育論」という理念ですね。これが先行して、実証的にその問題にせまるという傾向は少なかったように思います。

- （徳永）そろばんの話も、そうですか。
- （庄司）そろばんについても、時代とともに終ったという議論に終始して、調査をしてその結果やる必要がないと結論したんではなかったと思います。やはり「必要」がないという考えで決められていたと思います。ところがそろばん教育くらいね、教育効果のあがる教科は他にないんですよ。とにかく一斉授業。表をつくってただ読み上げるだけでこんなに伸びるのかという経験は少なかったですね。「教育者としての青春」（同前）にも書いてあります。
- （徳永）そろばんを習っておくと、暗算が得意になるという効果がありますね。
- （庄司）そう、だから別の意味づけで今でもそろばん教育に取り組んでいる人もいるんじゃないでしょうか。
- （山田）今日のお話がすごく面白い。小学校の現場が研究のフィールドになっていて、「小学校の民俗学」というものができるんじゃないかと思いました。アルバイトで若者が集まるコンビニなどでは、「コンビニの民俗学」なども考えられます。柳田の方法さえ踏まえればどこでも可能じゃないかと思えます。そこに貴重なものごとがいっぱい埋もれているのじゃないでしょうか。
- （庄司）敗戦以前、明治以前の日本人の生活がどこに残っているのかというような議論が方々にありますが、よく見ると、民俗学の働く場所はコンビニだけでなく、日常の場にいっぱいあるわけ。
- （山田）さきほどの「理科コトバ」で思い出したのですが、ＫＪ法の先輩で、一九五一年博多生まれの人から、子供の頃は悪ガキで田んぼや畑でよく遊んだ話を聞いたことがあるのですが、小学校に入ったらショックを受けたというんです。先生が蛙の絵を指して「これはカエルです」と教えたのです。先輩は入学以前、その動物がカエルだと呼ぶことを知らなかったからです。博多ではビキタンと言うんだそうです。ここで非常な違和感を覚えたという話なんです。いきなり標準語をぶつけてショックを与えて理科嫌いにするのではなくて、方言から入り、だんだん東京ではカエルというんです、というような手順の教育が必要だと思うんですが。
- （庄司）そう。だけどね、文部省のそういう統一・画一徹底教育はすごいモンでね。今ではもうアリの方言を覚えている人はほとんどなく、残っているのはアリンコくらいになってしまいました。すごい影響力です。僕の田舎などでは蛙のことをベッキと言うんです。ベッキというのはビキつまりヒキガエルの呼び名が広まってできた方言です。こういう変遷がいろいろあって現在があるという教育をやりたいもんです。
- （山田）インターネットが発達して小学校でも導入されていますが、そこで地方同士でも国際間でもぶつかり合う場面が多くなっている今日、逆にそれぞれの違い（方言）を提示しあうということが大切になってきているんではないかと思います。『声に出して読みたい日本語』（草思社　二〇〇一）で著名になった斉藤孝さんが、方言について発言していたんですが、関西の子供たちに秋田弁や津軽弁を教えたら夢中で覚えちゃったそうです。一時期にせよ、そういう体験はいいのではないかと思います。
- （庄司）今は、田舎でも方言が寂れて来たのではないか。山形の山奥の子供でも標準語に毛の生えたような言葉がしゃべれるようになって、そうでないのはジイサン・バアサンくらいになってきましたね。方言のもっているものの見方・考え方というのは、柳田さんあたりが開発し

たものが多いですが、僕などはこれを継承したい。たとえば、カブトムシなどというよりは、オニムシと言った方がすぐ分かります。また角のないカブトムシはボウズベンケイと呼びます。雄雌の違いがすぐ思い浮かぶ方言です。また、ゴトゴトムシと呼ぶ地方があります。いかにもカブトムシの歩いて行く様子が見えてきます。これからの言葉教育にも活かせる観点ではないでしょうか。

それからさっき、「民俗学」のことが出てきましたが、ここ成城大学の民俗学研究の若い人たちの間では、柳田民俗学はもう滅びるんではないか、民俗学研究も消えるのではないか、なんて話題が出るんですよ。どういうわけか、柳田社会科に取り組んだ僕たち三人がそういう会に参加させられたことがあったけど、そんなことはないでしょうと言ったけど、・・・いや面白いんですよ。民俗学とか人類学とかでも、その学問的転換という問題は出てくるでしょう。だから山田さんあたりが、新しい「民俗学」のアイディアだけでなく、それ以上の道筋を出してもらいたいなあと思っているわけ。

- （徳永）さっき、先生が昭和二〇年当時、「敗戦」という言葉は使いたくなかったというお話がありましたが、当時の世相としては「敗戦」という言葉は使いたくなかったということですか。
- （庄司）そう、だから「終戦」でいいと思っていたけど、それはだめだ、「敗戦」なんだという意見を聞くと、僕なんかは兵隊から帰って来たばかりだから、いやあ、さみしいねえと感じたね。
- （徳永）最近『永続敗戦論』（白井聡著　太田出版　二〇一三）という本が出ていまして、敗戦を認めないという意識が、いまだに政治家も含めて国民の間に継続しているのではないかという問題提起をしています。そして戦後日本のさまざまな問題は、敗戦を認めるという区切りを付けていないところに核心があるという議論です。こういう議論はどう思われますか。
- （庄司）そこは日本人論の問題ですね。日本人の「切れ目」の入れ方の問題、これをちゃんとやってこなかったんだということですね。だけどいつに間にか、警察予備隊から自衛隊へ変わり、彼らも死にものぐるいで戦わなきゃいけない、今よりも大変な時代だったんです。僕はこれまで海軍関係のビデオをかなり蒐集してきました。それを毎年「終戦記念日」（ほらね、「終戦」って言っちゃった）に見ているんです。終戦になる前の映像を何回も見ているわけ。これで思ったことは、昭和四〇年代ころ・高度成長期の日本人はまだいきいきしていたんです。でも、高度成長期を支えた世代はもう亡くなっている人が多いですが、戦時中は兵学校卒。士官学校卒の実力者だった人たちでしょう。影響力が大きかった世代のあいだでは、自分たちが負けたというのは認めたくなかったのではなかったか。だから区切りといっても難しかったと思いますね。また、いま世の中で熱心に発言している人たちというのは、もうあとのあとの世代ですから、敗戦を自覚せよと言われて蒸し返すのも難しかろうとおもいます。たとえば、靖国神社の問題にしても、僕などはこれを落ち着かせないといけないと思っています。だって、戦時中は死んだら靖国で合おうじゃないかと、訓練中に死んでいった人がいるわけですから。たまには靖国神社に行って「こっちは元気でやっているよ」と報告したりします。とにかくあの戦争ではバタバタ死んじゃったわけです。だから日本民族がこれに区切りをつけるというのは大変なんじゃないでしょうか。（2015.4.11　編集　尾崎）